



らよ何て分 ないら歩てす所に走 考さ機大きガか着のは時パパ食
でうかもが今とかれい、か位はり就えん能変いサ暖る下、代タンベ
きにをら好のことてて女らに、出職ら出性でしガかんに寒で、は物
るや思いき若ろいしいのねしパしられ回のし、サいで新しいしを7が
ことつたないもうちた人。かトたなつ良た動とんす聞かたぬ円な
。たいよ人あようらが治な力時頃いてい。き音でよ紙ら。い。
で平らでうにりうの、安か一代はでい服今には、す。をY夜とジ。
。和好すにはまなで連一もつがで、するがでく、いつシ勤10ヤコ
だきねや、し危はれ人悪た3東車けかたはくうでくけヤの円ムツ
かな。つ自た。険な去でくで力京もど。らくからてツ時のやべ

母は現さいたま市大宮区に9人兄弟の末っ子として生まれる。これは、母が体験した戦争の話である。母以外は、すべて男子で、5人が戦争にかかり出され、海軍志望だった二人の兄が戦争の犠牲となつた。下の兄が戦地に向かう前日横須賀まで両親が会いに行き、そして航空母艦の護衛船に爆弾が落ち、この世を去つた。家は農業と養蚕業。戦死した兄の子はまだ幼くて、私が背負つて学校に通つ

中たか子さん
(聞き書き 中正美さん)



川にかかるに学校（高等科）は荒き窓を開けたり、廊下に泣き出る。授業中には飽きたり、外に連れて遊ぶ。授業には参加する。子守をしていた。雪が降ると新しい下駄を親が買つてくれたが、橋のところで鼻緒が切れて、裸足で歩いた。冷たさでちぎれてしまった足と、買ってもらつたばかりの下駄が壊れてしまつたことが悲しくて泣いた」ともある。戦争が激しくなると勉強道具は持つては行く。道の端で兵隊さんとの手伝いをした。作業をし始めた。2年生になると田んぼの中、空襲のサイレンが鳴り響く。橋の下や畑に隠れた。岸の近くの方へ逃上した。橋の真ん中方へ移った。ここに機銃を発射されたり、あわてて走り出したり、あの怖い思いがまた現れた。

平和の大切さ

～戦争体験を聞く～

昭和6年生まれ89歳
終戦を迎えた場所
富士見市東大久保

新井良一さん



山口一仁さん



昭和8年生まれ(87歳)
終戦を迎えた場所
青森県五所川原市